

大船山

「恕」……言うは易く、行は難し 言之易而行之難

校長 細江 幸次

20代の頃からつい最近まで、「恕(じょ)」という言葉について何人もの先輩諸氏から教えていただきました。普段はなかなか見かけたり、使ったりすることはない文字ですが、「恕心」「恕の精神」といった言葉に使われることが多いようです。そして、この文字について調べてみると、すぐに古代中国の思想家、孔子と弟子との問答を見つけことができます。そこには以下のように示されています。

子貢が尋ねて言った、「ただ一言で、一生行ってゆくに値する言葉がありますでしょうか」と。
子曰く、「それはまず恕(思いやりの心)だろうな。(恕というのは) 自分が人からされたくないことは、人にもしてはならないということだよ」と。
(『論語』・旺文社)

孔子の教えは当たり前といえば、当たり前のことなのですが、ここ最近、いじめによる自死の報道が新聞やテレビで頻繁になされているのも事実です。孔子の教えは誰にでも十分理解できるくらいわかりやすいものなのに、一方では身近な人を死に追いやるくらいの行為をしてしまう、この矛盾はいったい何なのだろうと考えてしまいます。この矛盾は、いじめに限ったことではなく、日常の何気ない言動からも見て取ることができます。例えば、

- * 人から挨拶をされると気分がいいけど、自分からは滅多に挨拶はしない。
- * 自分の机に人が腰かけているといい気分がしないのに、普段考えもなく気軽に人の机の上に座っている。
- * 周りの仲間がヒソヒソと自分のことを言っている雰囲気を感じ取って悲しくなるのに、別の日には自分がそのヒソヒソ話の輪の中に入っている。……………

このような様子は何も特別な光景ではなく、もしかしたら上矢作小学校の日常でも見られることかもしれません。また、いじめの被害者がいつの間にか加害者になっていることや、いじめる・いじめられる関係が何かのきっかけで逆転してしまう場合も珍しいことではないことです。つまり、自分自身が辛い立場の側にあるときはそのことを敏感に感じ取ることができても、そうではない時には人の感覚・感性というのは意外にも鈍感になっているのかもしれない。そう考えるとこんなことを書いている自分自身も全く無意識のうちに同様のことをやっているかもしれないという心配も出てきます。それくらい人間というものは罪深き生き物だということでしょうか。

学級担任をしていた頃、授業の準備をしている時にこんな論説を見つけました。ご一読を。

(前略) 筆者は高校でこんな授業をした。「雄の狼2匹を狭い檻の中に入れた。雄の鳩2匹も狭い鳥かごの中に入れた。一晩後にはどうなるであろうか。」と子どもたちに聞いた。彼らは、様々な予想を出した。答えは、狼の檻の中は、一方の雄がうずくまり自分の首筋(つまり急所)を、もう一方の雄に露出して降参している。狼のような肉食獣の中には「降参」のサインがあり、このサインを出されるとそれ以上攻撃できないように本能的に組み込まれている。一方、鳩の檻の中では、一匹の雄と、一個のミンチ状の肉の塊を見つける。実は、その肉塊は喧嘩に負けた雄の残骸で、一方の雄はその状態になっても、肉塊をつつき続けている。鳩のような本来攻撃力のない動物の場合、「降参」のサインがないため「いつまでも、ネチネチ痛めつける」のである。以上が授業で語った話の筋(実際には約40分ぐらいの話になったが)である。

実は、この授業の前日に、自分のクラスで暴力的ないじめがあったことを知った。それを直接的に説教しても問題は解決しないと感じた。そこで、筆者が動物行動学の本の中で読んだ話をもとに、授業を構成した。鳩と狼に託して、陰湿的な暴力の背景に、その暴力をふるう側の弱さを語りたかったのである。(後略)

学校で教えるべき“知”とは何か ~自分知~ 【上越教育大学助教授 西川 純】(楽しい 理科授業 '99/3 No.391)

本校では人権教育推進の観点から、11月下旬より「思いやり宣言」をして、ひびきあい活動に取り組んでいます。